氏　　名	林　　史　樹
学位（専攻分野）	博士(文学)
学 位 記 番 号	総研大甲第497号
学位授与の日付	平成１３年３月２３日
学位授与の要件	文化科学研究科　地域文化学専攻 学位規則第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化 －忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例に－
論 文 審 査 委 員	主　査　教授　　藤井　龍彦 助教授　　岸上　伸啓 助教授　　佐々木　史郎 教授　　伊藤　亞人（東京大学）

論文内容の要旨

本論文は、韓国の定期市を巡回する移動商人親子の生活を記述した民族誌である。彼らの生きてきた現代を彼らの視点から再構築することを試み、その作業を通して生活手段として選択される「移動」について考察を加えたものである。韓国社会に関する人類学的な研究は韓国と日本が圧倒的な蓄積を持っているが、これまで人々の流動性に着目した研究はほとんどなかった。

本研究の目的は大きく 3つあげられる。①朝鮮の市場商人については、さまざまな分野で先行研究がだされたが、商取引を含めた移動商人の生活に深く入り込んで得た記録から分析を試みた研究はなかった。これまで研究対象として扱われることがなかった韓国における移動商人の生活を民族誌として提示し、地域研究としての韓国研究に貢献すること。②韓国社会の変化に対応する移動商人親子の選択を彼らの語りと統計データなどから再構築を試みることで、現代韓国の社会史研究に対して貢献すること。③韓国における移動商人が選択してきた「移動」を、人類学における移動研究のなかに位置づけることで、移動の概念をみなおすことである。

本研究の調査地は大韓民国忠清南道(Chung-cheong-nam-do)公州(Gong-ju)市を中心とする地域で、調査対象者は公州市郊外に住み、薬草を扱う移動商人の親子ＹＨ(78歳)とＩＭ(37歳)である。彼らは韓国忠清南道地域を範囲として商売を続けており、調査は彼らと行動をともにして進めた。調査期間は1998年 6月から約 8ヶ月間である。

彼らの50年間にわたる移動商人の生活形態や商取引の変化を調査するために、彼らが日々繰り返す商業活動の現場に立ち会って観察し、データとして記録した。彼らの語りを中心に、過去における状況と彼らが生活を続けるうえで行ってきた選択を記録した。それに加えて彼らが語ったことや調査で見聞したことを、農作物統計や交通・通信統計、市場統計などのほか、雑誌記事を参照しながら検証した。

調査から明らかになったことは、彼らは交通・通信手段の発達、取扱商品の国内需要の変化、定期市の衰退、海外輸入による市場の変化といった諸変化に応じて商売を変えてきたことである。しかし、それでも彼らが変えなかったのは移動する商売形態であり、本研究ではそのことに着目した。

そして、彼らが生活手段としてきた「移動」を考察するうえで、「規則的な移動」と「規則性を破る移動」という概念を使用し、彼らが今後も「移動」を選択するか否かを展望するうえで「距離」という概念を応用した。

これらの検証を通じて明らかになったことは、①これまで朝鮮社会は、農民主体の社会で土地にしがみついて田畑を耕していたため、固定的な社会であるといった安易な認識が支配的であったが、彼らはひとつの職業に縛られず、有利と思われる職業を転々としたことがわかった。このことは、農民なら農民、商人なら商人といった固定的な生業像に対して新たな視点を韓国研究に提示した。②政治や経済が中心として構築される現代史の見方に、社会史的な視点は新たな視点を提供する。本研究で扱った移動商人の事例からも、彼らが国家的な規模での変化と必ずしも対応して行動しておらず、彼らは取扱商品や交通・

通信手段に直接影響を与える社会変化の方に敏感に対応していたことがわかった。国家単位の社会認識に個人単位の社会認識を加えることで、より重層的に社会を捉えられることを示した。③これまで人類学における移動研究で扱われてきた移動の概念に対し、「生活手段としての移動」という概念を提示した。このことにより、これまで人が動くというだけで移動研究と一括りにされがちであった傾向に新しい知見をもたらした。

最後に、この「移動」の概念をもとにして、韓国社会において移動商人がなぜ今日まで存在したのか、今後も彼らが存在していくのかを考察した。

韓国社会では物々交換が好まれ対面的な取引が習慣化されていたことと、定期市自体が行楽の場であり現在もその地位をある程度保っていることから定期市が存在した。そのため、定期市が成り立つうえで必要な移動商人が存在すると先行研究ではいわれてきた。しかし、それ以外に、韓国・朝鮮社会が流動性を持っていたことが、土地を購入して店舗を構えない移動商人が多かったことに深く関わっていたことを本研究において指摘した。

さらに、韓国に移動商人が多く存在したことは、長い距離(いわば「遠隔地」)を交易するのが商人とすれば、韓国社会にそれだけ情報が行きとどかない「遠隔地」が多く存在したか、韓国の人々に情報を特定の専門家（商人）に任せる傾向が強かったかのどちらかといえる。現代の韓国社会では「遠隔地」が失われてきたといわれるが、これはすぐに「移動」がなくなることを意味しない。移動商人が移動を選択することでもたらされる「うまみ」を求めるかぎり新たな方法が模索されるからである。彼らは社会変化に応じて「遠隔地」をみつけ、あるいは創出し、そこまでの「距離」を商売に活かして移動を続ける。

論文の審査結果の要旨

本論文は固定した店舗を持たず定期市を巡回しながら商売を続ける「移動商人」の観察を通じた現代韓国社会の人類学的研究である。そこでは、申請者が生活をともにしながら観察と聞き取りを続けたある薬草商人親子のライフヒストリーを縦糸に、彼らの生活の場となった韓国社会の変化を横糸にしてその商人の生活誌を描くことにより、韓国社会を特徴づける流動性を検証するのみならず、さらにそこから近年人類学においてテーマとして取り上げられるようになった「移動」という概念の有効性を問い直そうとしている意欲的な力作である。

最初に、膨大な蓄積がある韓国と日本の韓国研究を振り返り、韓国社会が固定的であると捉えられている原因のひとつは、従来の研究が農村社会に偏っていた結果であることを指摘し、それを打破するためには、従来人類学では取り上げられることが極めて少なかった移動商人を研究対象とする必要があること、その際参与観察により、移動商人の活動の実態を正確かつ詳細に記述する必要があることの二つを導き出すことにより、韓国社会の流動性を示すという本論文の意図を明らかにする。

第１章では先行研究を概観し、歴史学や社会経済史研究による李朝朝鮮時代の移動商人と、その後登場してきた市回り商人の変遷の概略を説明し、本論の調査対象である移動商人を歴史の中に位置付ける。第２章においては自らの観察結果に基づき、現代の市回り商人の活動を、行動サイクル、ネットワークなどの項目に整理しているが、その記述は明確である。

本論文の中核である第３章と第４章では、情報提供者である薬草商人の家族を主人公としたライフヒストリーが展開される。まず第３章では、引退した老商人と彼の息子の若い薬草商人の２人の語りから、個人の目をとおした韓国現代史が生き生きと復元される。第４章では、彼らの活動の背景となる韓国社会の変化を説明するため各種の歴史・統計資料を使っているが、その際の資料の選択は適切である。

第５章では移動商人たちの最大の武器である「移動」という行為そのものの分析に移る。申請者は人類学で扱われてきた「移動」の概念を整理する中から、「生活手段としての移動」という概念を提唱する。それは基本的には「繰り返される移動」であり、「規則的な移動」と「規則を破る移動」の二つによって支えられていて、移民、観光などの「単発的な移動」とは区別されるべきであるとする。最後の終章において、生産者と消費者との間の地理的のみならず時間や情報面での隔たりも含む「距離」の概念をもってきて、韓国の移動商人たちの過去と未来における存続理由を求めている。

本研究は、社会経済視的研究が大部分を占めていた従来の韓国における商業や商人の研究の中で、人類学的観点を取り入れた初めての研究といえるもので、その意味で独創性は高いと評価できる。第２章と３章の記述は詳細であり、特定の個人のものとはいえ、彼らの視点からみたこの６０年間にわたる移動商人の生活が、生き生きと再構築されている。ライフヒストリーをデータとした研究は決して珍しいものではないが、韓国研究に限っていえばこれも初めてのもので、その資料的価値は高い。またこの方法を選択したことにより、申請者が意図した韓国社会の流動性の実態がきわめて明確に示されていることも、本論文の価値を高めるひとつの要因である。韓国社会の流動性が、個人の主体的、戦略的行

動に基づくものであるという点は、韓国式経営の研究などを通じてすでに述べられているところではあるが、本論文はその様相を具体的なケース・スタディーで実証したといえるものであり、韓国社会の研究に新たな貢献をしたことは疑いない。ライフヒストリーを中心とした本研究は、地域社会にせよ職場社会にせよ、個人を基礎とする流動性の高い韓国社会の研究にとって、もっともふさわしい研究方法を採用したといえる。

第５章で提唱された「生活手段としての移動」という概念も、その概念の広がりのあいまいさや比較研究の不十分さ等から必ずしも明確でないという問題はある。しかし、申請者は韓国の移動商人の「移動」を移民や観光などの「移動」と厳密に区別すべきであると主張してこのような概念を提唱したのであり、この薬草商人たちの活動をモデル化するという点では成功しているばかりではなく、今後人類学における「移動」の研究にとって新たな理論的展開を予見させるものとして、一定の評価を与えることができる。

以上のことから本論文は学位を授与するに十分に値するものと認定する。